

うだるように暑い夏の日の午後、葉桜の落とす木漏れ日の下に白い海軍の軍服が見えた。

夏休みの士官学校にいつものようにぎやかさはなく、静まりかえった校庭に蝉の鳴く声が響いていた。

レンは灰色の浴衣の袖で汗を拭うと、裸足に履いた下駄を鳴らしながら人影に近づいた。

「よう、久しぶりじゃねえか」

振り返りもせずに切れ長の目で梢を見上げたまま、真斗が問いかけた。

「子供の頃、一緒に蝉の抜け殻を集めて遊んだことを覚えているか？」

馬鹿みたいな遊びをしていたものだと、レンは苦笑した。

「今日はどうしたんだ」

海軍の宿舎にいるはずの真斗が、どうしてこんな場所に自分を呼び出したのだろうと、レンは訝った。

「最後に見ておきたいと思ったんだ」

真斗がまっすぐにレンの目を見返した。斬り込む

ような真剣な眼差しだった。

「二週間、休暇をもらった。休暇が終われば、前線に出る」

華族聖川家の流れをくむ聖川海運の跡取息子。安全な後方勤務で終わることも出来るはずだ。

「自分から志願したのか？ 死ぬかもしれないのに」

レンは思わず真斗の骨張った手首を掴んだ。

「見合い話があった。戦死せずに戻っても、聖川の家にふさわしい女性と夫婦めおとになる」

真斗が長いまつげを伏せて微笑んだ。涼しげな目元に影が落ちた。

「だから、これが最後だ」

肌を焼く日差しも蝉の鳴く声も、すべてが遠ざかっっていく。

レンは、軍服に身を包んだ幼馴染の身体を強引に抱きしめた。

何年も土の下で時を待つ蝉のように、この想いは羽化する日を待っていたのだとレンは悟った。

「その二週間で、俺にくれ」